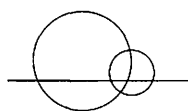


〔論文〕



東亜同文書院生が記録した90年前の中国・青海の地域像

愛知大学東亜同文書院記念センター長 藤田佳久
愛知大学文学部教授

1. はじめに

昨年(2008年)8月下旬、筆者ら(藤田、宮沢哲男、安仁屋政武、暁敏、高木秀和)は科学研究費と愛知大学I.C.C.S.の研究費で中国奥地の青海省を訪れるチャンスがあった。研究目的は近年の西部開発とそれにかかわる環境変化の研究であり、その報告は別稿に譲るが、それにより青海省の東部の一端を比較的広く巡検し、多くの事象を観察することができた。西部開発にともない、省都西寧のいちじるしい都市化や退耕還林の展開、広大な秃げ山や草地の改変などがかなりすすめられている様子も見ることができた。

このような変化や改変はその比較基準を設定するのはむつかしいが、その一つに東亜同文書院生が行った中国「大旅行」記録が存在しないかを確認した。その結果、700コースのうち、1コースだけが蘭州から西寧、そして青海湖までたどりついた記録を見出した。ただし、残念ながら、このコースを実施した班のメンバーは、青海地域内に調査研究テーマを設定していなかったため、詳細な調査報告書と日誌の記録はみられない。わずかに毎期作成したダイジェスト版の記録の中の一部に日誌風の記録が存在するにすぎない。

しかし、それは当時を記録した貴重な内容であり、今日の青海省の原点とみなすこともできる。そこで、この小論では当時の青海地域についてのごく一部の記録ではあるが、それをベースにしな

がら当時の青海地域の地域像を描いてみることを目的とした。

2. 青海省の概要

今日の青海省は中国の西部、西藏(チベット)高原が東北部へ延びる一角と、その西北部に乾燥した盆地であるツァイダム盆地からなる(図1)。全体としては大陸内陸部にあってしかもチベット高原の延長上にある。高原の標高は2,600m以上であり、その東部に中国では最大の湖である青海湖がある。名称そのままに同湖は晴天の日には青色に輝き、チベット人の神の居る神聖なる湖として信仰の対象にもなってきた。今日の「青海省」という名称はこの湖沼名を代表したものである。

今日の省面積は72万km²で、ほぼ日本の面積の2倍、しかし、人口は約540万人で愛知県の人口よりも少ない。標高が高いため、農耕地は省都西寧を流れる西寧川とそこに注ぐ支流域、および黄

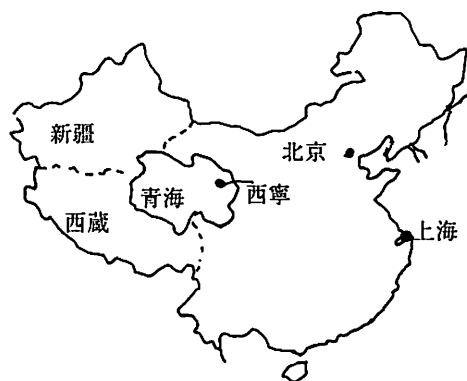


図1 青海省の位置図

河の省内での下流域に限定されている。西寧川流域は細長い同河谷底と支流の山間地域が中心であり、黄河流域は貴徳周辺の氾濫原を中心とした農地利用がみられる。

それ以外はツァイダム盆地を除けばほとんど高原と山地であり、森林植生も乏しく草地の植生が卓越し、農耕は困難で牧畜空間として利用され、遊牧民の世界が形成されてきた。

青海省の南半部はさらに標高が高くなり、4,000 m以上のチベット高原の一部となり、チベット自治区との境界線付近には5,000 m以上、さらに6,000 m以上の山々が連なる。この高原は黄河や長江、メコン川の大河川の源流地帯にもなっている。

省の北部はツァイダム盆地があり、乾燥地帯となっていて周囲の山地から流下してきた河川が盆地内で消失するワジとなっている。その東側は祁連山脈が西北から東南に連なり、その東側の甘肅省の河西回廊との境界をなしている。標高も高く、書院生達は9月であるのに山のいただきに雪が輝くのを見ている。祁連山脈も5,000 m以上の山地が多く、氷河も発達している。

上述したように祁連山脈の東側は河西回廊であり、青海の東部はチベット族のほか、モンゴル族や回族、そして漢族が移住をくりかえし、歴史的にも民族の興亡がみられた。古くは唐の時代、日月峠を西側のチベット族と東側の唐との境界にしたが、ずっとのちの18世紀、清の雍正帝がチベット族内の対立のスキを突いてこの一帯へ入り込み、チベット族と蒙古族の集団を支配し、「青海」とした。その支配は清朝末期から西寧の馬氏に委ねられるが、国民政府が誕生すると「青海」を「青海省」とし、省域も甘肅へ少し拡大し、今日に至っている。

書院生はそんな「青海省」誕生直前に「青海」へ入っており、本文で示すような貴重な経験をしている。

なお、今日の青海省は西部大開発によって投資

が西寧を中心に行われ、さまざまな地域で変化が進行中である。

3. 「青海」への大旅行

(1) 東亜同文書院生の「大旅行」

東亜同文書院生による「大旅行」は5期生による1907年から43期生による1943年まで、20世紀の前半期にほぼ700コースが実施された⁽¹⁾。その旅行範囲は中国を中心に満州、さらに東南アジアに及んだ。実施学年は最終学年で、専門学校であった当初は3年生であったが、高等専門学校へ昇格すると4年生となり、(旧制)大学へ昇格すると各ゼミ単位で行われた。大学昇格にともない高等専門学校の継承も行う目的で専門部も設けられ、専門部の書院生は従来型の「大旅行」をめざした。しかし、日中戦争が長期化する中で、次第にかつてのような自由なコース設定はできなくなっていった。

「大旅行」は毎年、10～20班が書院生の自由な意志で組織され、柔道部など体力のあるグループは健脚のより奥地をめざしたりした。各班は2名から5～6名単位が多く、5月出発の8月末から9月に帰校する徒歩中心の3～4カ月の旅行期間が多かった。円熟した1920年代には5～6カ月の長期旅行期間も珍しくなく、出発時の夏の上下衣が秋にまで旅が続くとボロボロになったり、中・晩秋の寒さに震えながら帰校したケースも多い。

各班員はそれぞれ各自で調査テーマを設定し、その調査報告書が卒業論文になり、それらのデータをベースに『支那省別全誌、全18巻』⁽²⁾や『新修支那省別全誌』⁽³⁾(全18巻の刊行予定が戦争終結により9巻で中断)が刊行された。また、途中から日誌も付加されるようになり、生々しい当時の地域情報や旅行の知恵を記録し、後輩にも伝えた。

そして、各学年とも大旅行の調査報告書や日誌の整理をした上で、旅行の面白さを伝えるため、

各班からのダイジェストを編集し、各班・各コースのダイジェスト集といえる大旅行・踏査記を各学年の想いをタイトルに付して印刷出版した。各班・各コースでの旅行体験の中の貴重な、珍しい、あるいは印象深い体験や観察が綴られ、ある班は実証的に、ある班は論理的に、ある班は哲学的に、と表現はかなり自由に委ねられた。また、各班が1台ずつ手にしたライカのカメラで撮影した風景やスナップの写真が何葉か班毎に収録され、大旅行のふんいきを伝えようとしている。そして巻頭には東亜同文会理事長や理事、それに孫文や曹錕、黎元洪ほか、当時の中国名士の揮毫が掲載され、大旅行の性格と成果の一端も示されている。

(2)「青海」をのぞいた書院生

そのような700コースの中で、青海省まで脚を伸ばしたのはたった1班だけであった⁽⁴⁾。それも蘭州から青海湖まで現地で寄り道をするようにコースを伸ばしたことによる。

1907年から始まった「大旅行」はかなり広範囲に及んだが、新疆や西藏の中心まで出かけた例はない。これはその地域が沙漠や山岳地帯のため、徒歩を中心とした旅行自体が書院生だけでは物理的に困難であったことによる。

もっとも2期生5人は1905～1906年の2年間、西域の西端のロシア国境から外モンゴルまで文字通りの大旅行を行っており、日本人初の西域調査を行っているが、これは制度化される「大旅行」前の特別なケースであった。しかし、その成功が制度としての「大旅行」を生んだという連続性はある。また、25期生の1班は旅の途中でコースの変更を余儀なくされ、西藏へキャラバンに加わって出かける寸前までいったケースもあった。

西藏については、その入口にまで達したコースをとった班がいくつかあった。2008年5月に中国・四川の奥地で発生した「四川大地震」はまだ記憶に生々しいが、その震源地である紋川や松藩にはいくつかの班が入り、雪山まで登ったりしている。

ここは四川省内ではあるが、西藏の山系の東方に延びた一部にあたり、人種的にも文化的にも従来は西藏文化圏であった。いくつかの班は西藏文化圏に入り、西藏文化に触れている。

青海も西藏文化圏であり、西藏高原が東北部へ延びたその高原上にある。青海湖は西藏人の神聖地であり、そこに棲む煌魚は西藏人の神聖魚である。標高は2,600m以上の山地からなり、いわば天空の別世界を形成してきたといえる。したがって、紋川や松藩も山岳へ登らねばならなかったが、青海へのコースも紋川や松藩へ行くよりもさらに遠く、山岳への厳しい旅行をしなくてはならなかった。徒歩が中心であった「大旅行」では3～4カ月の期間で青海まで脚を延ばすこと自体が困難であった。

では、そのような状況下においてどのような班が青海まで出かけたのであろうか。

それは第19期生のうちの1班が大正12年(1921年)に行った「大旅行」である。班の名前は「隴綏羊豚羊毛皮調査班」。班員は富田清藏、和田平市、小竹文夫、高橋治助、清水久藏、久米幸延、大江廣の6名(写真1)。班員数は平均よりもやや多い。うち小竹文夫はのちに書院の教授となり、馬場欽太郎のあとを継いで日中戦争期に「大旅行」指導室を支えている。専門は東洋史・中国史で、「大旅行」ダイジェスト版に寄せた序文は、前任者で



〔写真1〕第19期生の「青海行」メンバー。
このうち4人が青海へ。

(東亜同文書院「虎穴龍鎮」より作成)
(治)橋高 米久 江大 (久)水清 (右読み)
田和 田富 竹小



ある地理学者馬場鞞太郎の客観性をベースにしたふんいきを変え、情緒的になっている。その背後にはこの「大旅行」で半年間も足跡を残した自信が後輩達を鼓舞する形になったものとも思われる。

そのコースは図2に示すように文字通り「大旅行」であった。すなわち、上海を出発したあと、

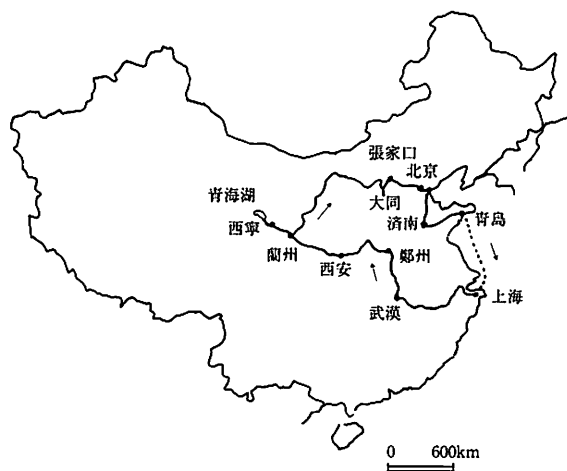


図2 第19期生のうち青海行きコース図

漢口まで長江をさか上り、そこから北上し黄河流域の鄭州へ陸行、黄河をさか上り、途中から支流の渭水沿いに西進し、西安へ。そしてさらに西進して平涼、再び黄河の中流の蘭州へ。そしてそこから青海地域の入口にあたる西寧へ入り、さらに西進し、日月山を越えて青海湖畔までたどりついている。上海出発は6月26日とやや遅いが、青海湖畔到着は9月20日で出発から3カ月も要している。そして帰路に魯沙爾(タール寺)へ寄り、西寧から蘭州へ戻っている。そして蘭州から黄河の流れとともに下り、中衛、寧夏、さらに黄河が三川に分流するいわゆる「ユートピア三導河」を訪ね、ここでこの一帯の開発にかかわった宣教師による開拓史をきき取るという貴重な記録を残している。そして包頭、さらに帰化城まで下ったあと、一部班員は黄河と別れて山西省へ南下し大同を訪ね、雲崗の石仏群を見物し、他の班員は張家口へ出ている。大同訪問は11月6日、折しも吹雪で3寸の積雪量であったと記している。夏姿の一行には寒さがこたえたに違いない。そして揃っ

て北京へ。しばらく北京に滞在したあと天津、さらに済南から青島へ巡り、船で上海へ戻っている。上海着は11月24日、出発から152日目の文字通り「大旅行」であり、途中病人も出たが、6人の班員がすべて無事の「帰院」であった。

当初の予定は蘭州もしくは西寧までが西端の訪問地であり、そこで羊毛調査を行ったあと、そこから黄河を下るコースであった。

蘭州では同宿した甘肅第2班の2人と4人の日本人および1人の中国人が加わり、日本人会を開いて徹夜で語り明かしたことがあった。その中に蘭州で歯科医を開業中の前田氏がいて、日本人で青海湖を見たのはまだ前田氏1人だけだという情報に接し、青海へ「急に行きたい気がした。殊に日本人で青海に足跡を印した者は只蘭州に居られる前田氏1人なのを思うと私等の胸は高鳴った」⁽⁵⁾と記している。

こうした現地での思わぬ情報もあって9月9日、蘭州を出発。再び蘭州へ戻るまでに20日間を予定している。ただし、体調をくずした小竹と清水を蘭州へ残し、4人で出発している。小竹文夫は青海までは行っていないことになる。

蘭州からは400華里の距離をすすみ、西寧に9月14日到着。ここで甘肅鎮守使兼蒙蕃宣慰使の馬駙將軍を訪ねている。馬駙將軍は甘肅の回教徒5大統領のうち最も「剽悍な1人」⁽⁶⁾として知られていたと記している。背丈は6尺余りの大男、偉丈夫であったとする。そしてこの馬駙將軍もまた、自分も青海へ「秋の巡狩」⁽⁷⁾に行くから一緒に行くようにと青海行きをすすめたことも、その次の引きがねになったことがうかがわれる。「私達は此の話に更に胸を躍らした。「青海行かざるべからず」。皆んなの胸に嘶り響いた」⁽⁸⁾とそのうれしさや喜びを記している。

「秋の巡狩」というのは、「年2回、蒙蕃宣慰使の職務上、青海を巡って諸酋長を会し、礼を受けるのである」⁽⁹⁾と説明している。したがって、一行5人にとっては幸運な誘いであったといえる。

こうして、しっかりした案内人をつけてもらうことができ、馬に乗って青海湖へ出かけることになったのである。

(3)「青海省」域をめぐる

ところで、彼らの記録文中には「青海」という用語がよく使われているが、「青海省」とは表現していない。西寧は今日で、青海省の省都であり、今日的には「青海」といえばこの西寧は「青海」を示すことになるが、当時のこの班の記録では西寧は西寧であり、そこには青海省と関係づける表現はみられない。したがって、書院生の感覚からすれば、「青海」は西寧よりもっと奥の、山々を越えたその奥にある「青海湖」とそれ以遠の地域を指していたように読める。「青海湖」は中国内陸部にある最大の湖で、晴天下に文字通りコバルト色に輝く水面は人々に神聖な場所という思いを抱かせる。前述したように西藏の人々の聖なる湖であり、「青海湖」は「青海」という地域呼称をもたらし、「青海」のシンボルであった。それゆえに、「青海」は「青海湖」をあらわす表現でもあった。湖ではあるが、その広さからみれば「海」と表現されるほどでもあったといえる。

書院生が西寧の地名には「青海」という関連認識をもたなかったということは、当時、中国人一般も「青海」の場所的認識がそのようであったことを思わせる。これは当時、西寧は甘肅省に属しており、青海は西寧の西方にあって南北に連なる分水嶺の日月山系の山地が境であったことによる。そしてその境以西はまさに大清帝国も認めた西藏であったのである。

この点については、青海と甘肅省との領域の変化から説明できる。

第19期生が「大旅行」を行った大正12年(1921)の民国期に「青海」は存在し、認識されていたものの、清朝以来の省の自立性の弱いレベルに対応した位置づけから、甘肅省の一種の預り地的存在の特別自治区とされ、甘辺寧海鎮守使区とされて

いた。そして、西寧、さらに奥地の丹噶爾までが甘肅省の省域に含まれていた(図3)。それより奥の日月山を含む南北に連なる日月山系が甘肅省と青海省の境界であった。前述の馬騏將軍は当時、甘肅省の西寧にあって、「秋の巡狩」のように時に青海省を巡り、各部族の酋長に会い、青海地域の統治を行っていたのである。

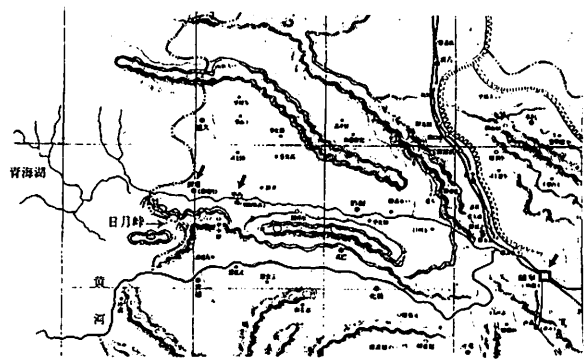


図3 「青海省」設置前の甘肅省との境界
(『支那省別全誌』より)

したがって、第19期生の一行にとって、蘭州から出かけた西寧も、そしてさらに丹噶爾までも甘肅省であり、青海はその先の日月山以遠のはるかに遠い土地であった。そこはまた、一行が記録するように「蕃地」であり、「蕃人」が住む所という省自体の自治管理のできない世界として認識されていたことがわかる。

その甘肅省と青海の境界線が変化したのは、国民政府の政権が確立した時である。中国では王朝が替わる時に、地名や省域、県域などが再編成されるケースは多い。

国民政府は民国16年(1928)、首都を南京へ移すとともに省城の変更、特別行政区の廃止と改省、旧道制の廃止、市制の新設など大幅な変更を実施した。翌17年には京兆特別行政区を廃止して新設の河北省へ編入、また熱河、綏遠、察哈爾の特別行政区を省へ、川辺特別行政区を西康省、甘辺寧夏護軍使区を寧夏省とし、そして馬騏將軍が代表になっていた甘辺寧海鎮守使区が「青海省」に改省し、あわせてそれまで甘肅省内であった旧西寧道の8県も青海省へ移した⁽¹⁰⁾。なお、甘肅省

からは寧夏省も独立したため、広大な省域を有していた甘肅省はやや縮小している。

こうして、民国 17 年以來、「青海省」が独立し、青海省はそれ以前の「青海」の甘肅省との境界であった日月山系がさらに東進して、西寧の谷とその南方一帯をとり込むことになった（図 4）。それはいうまでもないが、第 19 期生の一行が青海入りしたのちのことであった。

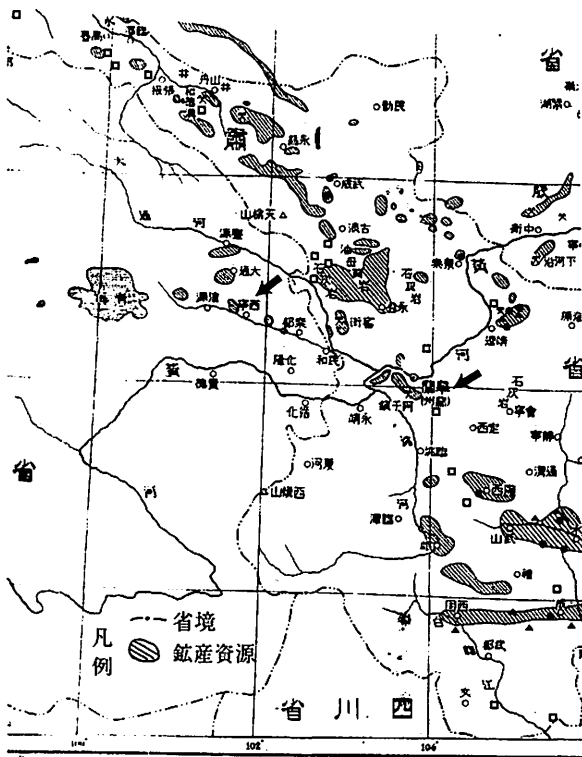


図 4 「青海省」設置後の甘肅省との境界（『新修支那省別全誌』より）

4. 書院生が記録した青海の地域像

(1) 「青海」行きコース

では、西寧からどのようなコースで青海湖へ向かったのであろうか。

前掲図 2 は彼らのコース記録を地図上に示したものである。彼らは上海から出発して上海へ戻るコースを地図上に描いているが、それはきわめてラフスケッチであり、とりわけ西寧から青海湖へのコースは、コースを示す点線が両者の間をわずかに結んでいるだけしか示されていない。

図 5 に示したコースは、西寧を 9 月 17 日に出発したあと西寧川沿いにさか上り、札麻隆からの溪谷を上り切ったところにある丹喝爾へたどりついている。ここは文字通り青海への入口にあたる町であり、戦後は西寧に中心地を替えられるが、当時は青海地域の中心地でもあった。

この丹喝爾から方向を変えて山岳地帯へ入り込み、さらに西寧川の源流一帯が日月峠で、ここを過ぎると景観は一変し、一大草原の高原地帯へと入る。日月峠を越えると道はなくなり、秋の季節、背丈ほど伸びた草原を下り、途中で案内人ともはぐれ、海神廟で一夜を過ごすことになった。翌日には案内人とも出会い、正面に見える青海湖へ一気に直進し、9 月 20 日に青海湖畔にたどりついている。そして再び往路を戻り、丹喝爾を過ぎ札麻隆で溪谷から抜け出したあと東南方へ道なき道

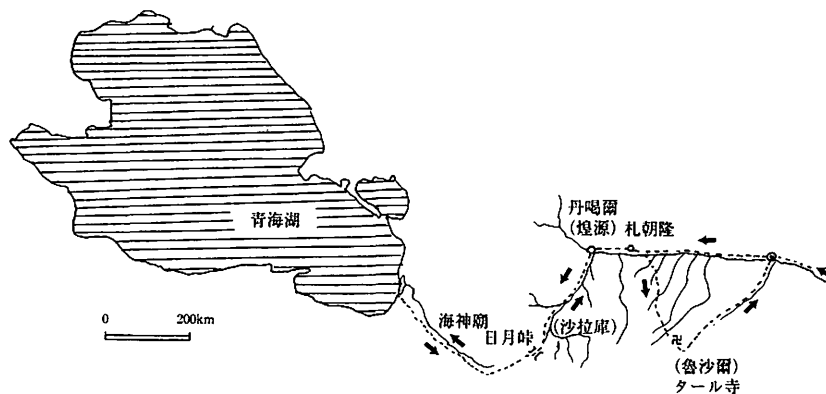


図 5 第 19 期生の「青海行」コースの西寧からのコース図（同コース記録から作成）

をたどり魯沙爾でタール寺を訪れている。魯沙爾はラマ教の代表的聖地であり、ぜひ立ち寄りたい場所であったと思われる。そして南川沿いの道を西寧に戻っている。9月23日のことである。そしてさらに9月27日に蘭州へ到着し、数日後黄河を下る旅に出発している。

以下、青海湖へ至るコースでの観察事項をみみる。

(2) 西寧

西寧は今日では青海省の省都であるが、前述したように当時はそうではなかった。しかし、青海地方への入口であり出口として重要な位置にあり、それが国民政府により青海省の省都になったといえる。しかし、『支那省別全誌』には西寧の町は独立時に取り上げていない。恐らく情報がなかったことと、それほど注目される町ではなかったということであろう。

一行は9月16日に西寧に到着。すでに連山には雪がみられ、晩秋の寒風が吹く季節になっていた。当時、西寧の城壁はきわめて大きかったこと、また師範学校が2つもあり、その1つは省立であるが、もう1つは地元将軍である馬騏の経営する学校だとしている。この馬騏は旅館も経営していることも一行は入城のさいに気がついており、馬騏将軍がこの地域でかなり力を有していることをうかがわせる。書院生達は多くの場合、将軍に会見を申し込み、会談し、揮毫をもらったりしている。この一行も同将軍に会うために訪れているが将軍が病気だということで会うことはできなかった。しかし、のちに将軍に世話になることになる。

西寧には福音堂があったことも記録している。奥地へ入った書院生達は訪ねた各地の町に教会があると、福音堂であれ、天主堂であれ、訪問して宣教師に会い、地域とのつながりや地域活動の様子などをきき取っている。そして多くの場合、欧米、とくにヨーロッパの宣教師がこのような奥地へ入り込み、布教を目的としながらも、地域の住

民を教育し、あるいは医療活動に従事していることに驚き敬服して記録している。

西寧にある福音堂にも一行は訪問し、リドレイ氏(イギリス人)とハリス氏の2人に会っている。リドレイ宣教師は59歳で、西寧にはすでに28年間滞在していること、当初、地元民は回教徒とラマ教徒で迷信深く、頑固で、10年間献身的な努力をしたにもかかわらず信者は皆無であったこと、それが11年目に1人入信を得たが、それでもなかなか信者はふえず苦勞したこと、そしてようやく信者数が170人余に達したこと、など布教のむつかしさとそれへの努力のパワーを実感している⁽¹¹⁾。そして、このリドレイ氏から青海の話も聞き、一行の青海行きをすすめられ、それが一行を青海行きに駆り立てた一つの要因にもなった。

なお、一行は青海湖から戻ったあと蘭州から黄河を下り、いわゆるユートピア三角州といわれるようになった三導河を訪ねている。そこでも宣教師に会い、実にその宣教師がそれまで未開拓の地であった三導河の開拓を自らの手ですすめ、やがて地元へ入植する農民もふえ、見事に耕作地へ変わって、まさに「ユートピア」になった経過を知って、その宣教師に敬意を表している。これも中国近代史の中で、個別的には中国辺境の開拓史の一つとして宣教師が果たした役割を記録した重要な記録になるように思われる。

西寧の宣教師も中国奥地の一片の田舎町ではあったが、そこに近代化のための貴重な最初の一滴を与えたことは一行の記録からも読み取ることが出来、それによる町の近代化の動きが、戦後の西寧を省都へ昇格させたという仮説も検討したくなるほどである。

教会の帰路、病気で会えなかった馬騏将軍に会い、「秋の巡狩」に青海へ行くので一緒に行くことを誘われ、青海行が具体化することになった。そして案内人と馬が提供され西寧から出発できた。秋晴れの心地よい日であったと記録している。

(3) 西寧川流域

コースは西寧の町を下る川である西寧川をさかのぼる。次第に川の水が澄んできて、それまで見てきた褐色の川の水の色とは一変した様子に驚いている。渓谷への入口の村である札麻隆を過ぎると、渓谷美ときれいな川の水、そして白榆の並木がつづき、日本の景色を思い起こすとしている。辺境の地でありながら、その当時、道路沿いに並木が配されていたことに、中国の古くからの道の管理方法がうかがい知れる。

(4) 丹噶爾（のち改称で煌源县）

丹噶爾は青海に最も近い甘肅省西辺境域の中心地であった。この町で一行は青海行のために必要な天幕、鍋、毛布、その他の用具を購入したほか、7日分の食糧として饅々や麺を求め、さらにロウソクも求めている。この町にはそれらを購入出来る商店が揃っていたことを示している。県知事へも挨拶に出かけるのは通例になっており、その折、県知事からも必要な用具を借りたと記している。

全体として丹噶爾の町全体に関する記述はほとんどみられない。往路、復路とも丹噶爾では滞在時間が短く、宿泊地として利用したにすぎなかったためであろう。

(5) 日月峠への道

丹噶爾からは西方へつづく西寧川を離れ、南方から流入する支流沿いをさかのぼり、上流の沙拉庫図をめざしている。沙拉庫図は青海域で、支流の谷は深く、急峻な谷をたどっている。沙拉庫図は小さな寒村で、住民の風俗は漢民族とあまり変わらないので、青海のふんいきが味わえず一行は気落ちしたと記している。

翌朝は雪で粉雪が舞う天気の中をさらに西進する。近くに日月山、1万2千尺の高峰が目の前にそびえ、その尾根筋に向かってさか上ると日月峠になる（写真2）。この峠を境にして西方と東方は地形およびそれにとともなう景観も大きく異なる。



〔写真2〕今日の日月峠の山系（2008年8月撮影）

る。東方はこれまでの渓谷、西方は高原で草原地帯へ一変する。その境界峠の頂上には5～6尺の高さの石が2つあり、その表面には太陽と三日月の形が刻まれている、それでこの峠が日月峠と称されると記している。

一行は急に晴れたその先に日月峠に西の大草原を見ることが出来、これぞ「青海」だとする思いを強くし、沙拉庫図での気落ちした気持ちが吹きとんでいる。高原地形のため、ところどころに湖沼が銀色に光っているのを見ている。また、トカゲのような薄気味悪い動物がハゲ土の上で腹ばいになって、馬が近づくと穴の中に逃げ込んで頭を出している光景も見ている。これは実際は大きなネズミで、現地には今も沢山の巣穴を現在も見ることが出来るが、いずれにせよ観察の目は行き届き、確実であったことがうかがわれる。

「実に日月山を境として東と西とは、その風俗に於て、四辺の景物に於て、全く別天地をなしているのである⁽¹²⁾」ほど青海と甘肅省とは表情がはっきりと異なっていたのである。

(6) 青海へ入る

そしていよいよ青海入りとなった。馬に乗って峠を下り始めるが、草は馬と人を埋め込む高さで、先行する案内人を見失うほどだと記している。日月峠以西の高原における草がいかに豊かであったかがわかる。これは今日の現地の草原に比べると

大違いである。今日の草原は背丈は低く、人の姿が見えなくなるほどでもなく、密度も低い（写真3）。西部開発と商品化の波の中、家畜の増加が草の豊かさを消滅させたのではないかと思われる。その点で当時の草原の状況記録は貴重であり、重要だということができる。



〔写真3〕今日の日月峠を越えた大草原（2008年8月撮影）

それでも当時、一行はそんな草原での5～600頭の羊の群れやヤクの群れにも出会っており（写真4）、これらの豊かな大草原が家畜の放牧地として利用されていたことを示している。それでもなお豊かな大草原が温存されていたことに今日とは異なるシステムの存在をうかがわせる。



〔写真4〕哲院生が出会ったヤクの群れ（「虎穴龍鎮」より）

ところで、草原で出会ったのは、羊やヤクだけではなかった。全く現地人と同じ服装をし、顔を黒くしている羊毛の買出人の2人で、丹噶爾から入ってきたと記録している。いずれも現地人の服装をしており、そうしないと現地人から危害を加えられやすいからだと言われている。とくに青

海湖周辺の牧民の性格は荒く、旅人を平気で襲うと記した旅行記を読んだことがあり、現実感あふれる出会いだと思われる。

彼らとの会話を通じて、青海には貨幣がないこと、そのため商取引はすべて物々交換方式であり、茶や布、麵などと羊毛を交換すること、金銀は沢山あるが、それらはすべて装飾品に利用されていること、などの情報を得ている。そして商人達が物々交換用の茶（官茶）を馬に積んでいるのを観察している。

そして丘陵の陰に3～4張りの低い黒色で多角形の天幕を見出している。その天幕からは煙がたなびき、生活のニオイを感じている。そして、天幕の家に近づくと「蕃子狗」と称する青海産の野犬が躍り出て吠えるのに驚嘆している。蒙古犬以上の猛猛さで、草原を旅する人と馬がしばしばこの野犬に襲われると記している。そして天幕生活と天幕の住民をみて、「彼らは今も、原始の世界に水草を追ふて昔ながらの天幕生活を営んでるのであった」、「総てが太古其儘だ」などとその光景をまとめている。

また、さらに下ったところで羊の群れを追う現地の老人にも会っている。その風貌は、髪は無造作に耳のあたりから後ろに巻きつけ、やはり黒い顔にバターをつけているため、顔が光っている。また、首から糸をつるし、その先に銀の小箱をノドにつり下げ、その中に仏像を入れている。そして手には珠子をつけ、ラマ教徒特有のスタイルだとしている。

しかし、丘の上から青海湖が見え、すぐ近くだとの錯覚で、急いで丘を下ったために案内人を見失ってしまう。日は暮れ、祁連山から吹きおろす寒風にふるえ「蕃子狗」の鳴き声が響く暗闇の中で「悲壯の涙が頬を伝ふ⁽¹³⁾」と記している。

そして遠くに瞬間的に上った焚火を認め、草原上をそこへ向かうと、それが昼間土づくりの家にみえた海神廟であった。現地人は居らず漢人の旅行者と馬騏將軍の部下がおり、「私等は生きる事

の出来た嬉しさと絶域の旅の寂しさに、とめどなき涙が落つるのであった⁽¹⁴⁾」と命が救われた安堵の気持ちを吐露している。

中国本土の農耕をベースとする比較的慣れやすい世界とは全く異なった大草原の遊牧世界へまぎれ込んだ書院生が、その異界の中で大いに戸惑った様子をうかがい知ることができる。

(7) 青海湖にふれる

翌9月20日、ようやく案内人に巡り会え、草原を湖方向をめざして進むことになった。途中、天幕に白い旗が立っており、それは酋長の天幕だとしている。天幕にも色々サインがあることが記録からわかる。酋長の天幕とはいえ、周辺に他の天幕が集中しているわけではなく、遊牧社会における統率者の空間的な存在形態が集村の多い中国の農村空間の構成とは異なっていることが知られる。

また、別の場所で黒い天幕2つを記録している。天幕の間で二人の女らしい人物が髪を結び、1人の女性は黒髪を背中へ垂らし、エビ茶色の長い衣を左衽に合わせて細帯を締め、それが筒袖を着た日本の女性のようにみえたと記している。また、背中に貝片の美しい装飾品が2列並んでいるのも見ており、遊牧社会の女性達の飾りにも遊牧民の特色が読みとっている。なお、一行の写真には酋長の家の2人の婦人の姿が掲載されており、その1人の女性の背中には貝片の2列に並んだ装飾品がみられる(写真5)。天幕の間には青海犬の蕃子狗が寝ており、恐らくはこの2張りの天幕も一家族ないしは親族関係のものであろう。このことは、遊牧民は1張か2張の天幕で遊牧生活を送っており、集団居住をしていないことがそれらの記録から読みとれる。それは今日のこの一帯にみられる遊牧民の天幕の分布とも共通し、長い伝統がそのような遊牧生活をシステムとして支えてきたことをうかがわせる。

丘を下る一行の目に丘の下に青海湖の広がり



【写真5】青海酋長の婦女（『虎穴龍頤』より）

みえ、湖の方から強い風が吹き、波が高いとしている。好天ではあるが、日中の海風の風が青海湖でも生じていたことがわかる。そして、湖面の北方に褐色のピラミッド形の砂丘を見ている。これは今日もそのまま存在し、複数の砂丘からなる沙漠となっている。これは丘の上からしか観察出来ないことからすれば、ここでも一行の観察力がすぐれていたことがわかる。

そして丘の下方部分に沼があり、その沼の付近には白色化した土壌があり、塩化現象がみられた。この沼の水を味わうと塩分が含まれていることから、それらが注ぐ青海湖は塩分が含まれていることを推定している。そして実際、青海湖に注ぐアルコン河が青海湖と接するところへ到って、ついに青海湖と湖水の塩からさにふれている。その時の光景は次の通りである。

「茫々たる青海が眼前に展開して、北岸の砂丘が少なく波の影に見えかくれする。はるかに海の彼方に白雲の山が見える。祁連の支脈であろう。飄々と海面を吹く風と共に転がり来る青い波は岸

に白く砕ける。放牧された駱駝の群が交る交る来ては、長い頭をさしのべて水を飲む、馬が勇む。私等は砕ける飛沫に征衣を濡らして馬に飲かさせた。九月二十日だ。雪に震え、飢に泣き、夜から夜へと彷徨辛酸した。東海の遊子は限りなき歓喜に胸を躍らして歌った⁽¹⁵⁾」(写真6)。



〔写真6〕今日の青海湖、最西端の鳥島から(2008年8月撮影)

(8) 魯沙爾の金瓦寺

一行は青海湖を味ったあと、往路を戻り、丹噶爾から溪谷を出て札麻隆まで帰ると、そこからコースを変え、南部の山々と河川が織りなす山地を横断して魯沙爾へ徒歩で向かっている。本来なら西寧へ戻り、南下して向かうコースがわかりやすいが、それでは直角三角形の直角を挟んだ二辺の距離になって遠回りになると判断したのであろう。しかし、西寧川へ南側から流下する諸支流と山系を次々と横断することになり、「山また山、河また河の迷路をたどる⁽¹⁶⁾」と記している。

この魯沙爾は今では金瓦寺というより塔尔寺(タール寺)として有名である。チベット高原をめぐる一帯にはラマ教が流布し、チベット人や蒙古人がそれを信仰している。その中にいくつかの拠点になるラマ教の寺院群があり、そのうちの一つがこのタール寺である。

一行もそれを熟知しており、そこを訪ねたのである。しかし、こうして訪ねた魯沙爾は淋しい街だと記している⁽¹⁷⁾。街の中の河を越え山を登ると、中腹から裾野にかけて幾十もの洋館のような

ラマ寺がみえたとする。その中の代表的なラマ寺が金瓦寺で、銅で葺いた屋根の上に三分ほどの金を流し、それが太陽の光にあたり見事に輝いているのをみている。

当時、ラマ僧は四千人いたとする。名刺を差出して本堂を案内してもらい、多くの美しい壁画の仏画や青磁器を見せてもらっている。ラマ教徒以外にも堂内の見物ができたことがわかる(写真7)。



〔写真7〕今日のタール寺
(右から安仁屋、藤田、宮沢、暁の4人。
もう1人高木も参加した青海調査 2008年8月)

寺境内で多くの修行者が腹這いになり屈伸して修行をしている姿も見ており、中には蒙古から十年もかけて五体投地をしながらやってきたラマ教徒もいると記している。

本堂の軒下には法輪子という「経文字を羊の皮で包んだ円筒形のものがならんで吊ってある⁽¹⁸⁾」。いわゆるブンブンである。今日では羊皮でカバーされず、金属の筒である。これを回転させれば経文を全部読んだことになる」と記している。他の旅行記では、罪も消えるとされ、人を殺してもこの法輪子を回転させれば許されるので、旅人は彼らに会うのを怖れていたと記している例もある。

ところで、一行はここで祭に出会った記録を残している。

すなわち、魯沙爾の街と寺から離れた河原一面に灯がともされ、不夜城となり、河岸の上では多くの飾り立てた男女が唄を歌い、酒を飲んで夜を明かすのだと記している。そして寺の方向から地

元の少女がきれいな声で唄を歌うと街の方にある丘からは漢人が唄いかえし、それに対してさらに地元の少女の中から美声の持ち主が歌い、漢人もそれに呼応して歌うというくりかえしである。河を挟んだ両方の丘の上からノド自慢を交互にする祭り光景が生き生きと記録されている。これは一種の歌垣の風習だと思われる。少数民族地帯には今日もみられるが、ラマ教の本山的な街でこれがみられるのは興味深い。しかも、地元のラマ教を信仰する非漢人と漢人とが交互に唄う様子は一つの発展型であろう。河を挟んでチベット系人、蒙古系人と漢人とが分かれて歌う様は、両者が棲み分けて居住している様子も伝えてくれて興味深い。

こうして、このあと「乞食の様な態をして西寧に帰った」とし、西寧ではあらためて馬騏將軍に会ってお別れの挨拶をして蘭州へ向かって旅立ったと記している。

5. 青海の遊牧人と馬氏の支配

ところで、記録の中であらためて青海人の生活をまとめ、また馬騏將軍による朝宗の礼についてのまとめが記されている。旅の中での観察を事象としてまとめた記録で、「幸乃武」名で記している。

(1) 青海の住民の生活

一行は青海に住む住民を「青海の蕃人」と記している。「蕃人」は非文明人の意味として使ったものであるが、一行からみれば、農耕民とは異なる異界の住民、民族ということになるのだろう。本来は遊牧民と称すべきである。

この「青海の蕃人⁽¹⁹⁾」には、蕃子、紅帽兒、過路などの種族に分けられるが、ラマ教を中心に「信仰に強い野蛮人⁽²⁰⁾」で、よく言えば「ただ信じ得る人間⁽²¹⁾」であるとする。「朝夕ラマ教典を念誦しながら水草を追ふて曠野に彷徨してゐるのである⁽²²⁾」と記している。

遊牧生活をする彼らには当然家屋はなく、長さ3間幅で1間半くらいの黒い天幕が住居となっている。彼らは家畜とともに移動するのであり、春

夏の5～7月には山へ移動し、8月の降雪の季節に山を降りる。家畜は羊、ヤク、ラクダ。したがって衣類は毛皮で三角形の皮帽子、食材は肉、腰に三尺余の刀、女は髪を後ろに垂らし、背中に貝片か人骨の飾りをつける。言語はチベット語に近い「蕃子語」だとする。

資源としては羊毛が代表で、西寧経由で毎年1千万斤が移出、しかしなお1千万斤も死蔵されているとしている。他に塩、獣皮、金、麝香なども豊かで、金沙江沿いでは砂金や塊金が埋蔵されていると記している。

(2) 朝宗の礼

前述したように、青海は当時甘肅省西寧をベースとする蒙蕃宣慰使が管理しており、青海省としてまでは自立していなかった。青海行きで世話になった馬騏將軍はその役であり、折しもこの時期馬騏將軍の青海行き、つまり「朝宗の礼」のうち「秋の巡狩」で青海を巡る旅と同じ時期に青海へ出かけることが出来、幸運であったといえる。

青海で一旦別れた馬騏將軍とその軍隊(写真8)に会うのはそれほど偶然ともいえない。同將軍の部下が書院生一行を案内していたからである。



【写真8】青海の土人兵（『虎穴龍鎮』より）

馬騏將軍とその軍隊は幾十という天幕を張り、夜中まで火を焚いて滞在していた。馬に乗った地元の「蕃族」の一隊が駆けてくると「朝宗の礼」が始まったとしている。一隊の中には赤や青や紫の美装をした酋長が加わっていて、將軍は彼らからの礼を受け、各酋長からこの1年間の状況を聞

いて、将軍はそれを北京へ報告するというシステムである。

しかし、馬騏将軍の任務とはいえ、この「朝宗の礼」が及ぶ範囲は青海の東部の一部地域だけにすぎないとも記している。

その時、一行が見た光景は次のように記されている。

「……その北に続く砂丘、朝日に燃え立つ、雪の祁連山、その間に二千年昔の朝宗の絵巻物が展開して行く。銅色に焼けた、逞しい筋肉の騎士の腰間に刀がキラキラ輝く、朔風に旗旗が翻る、赤と青と紫の派手な朔北の天地に相応しい服装をした酋長が、馬騏将軍の天幕に繰込んでくる。色褪せたヘルメットに蓬髪破衣の東海の游子がその後続く。大男の将軍が厳めしい騎士を従へて天幕の外へ顔を出す。数多の酋長が一隊、一隊と、交る交る潜族の若者等に囲まれて、将軍の前に跪座して一礼する。胡馬がいなく。将軍は私等の服装を見ていたが、晴れやかな顔に微笑を湛へて、「你門日本人、一天吃三頓飯、可是三天不吃飯、

也不要緊、实在是可佩服」と云ふ、髻の案内人から前日来の私等の困苦を聞いたのであろう。羊一頭贈物として呉れた⁽²³⁾」。

その記述の中から、一行は「朝宗の礼」を目の前で見たばかりでなく、その行列にも加わって参加した様子がわかる。くりかえすが、この朝宗の礼は、清末以来、西寧の回教徒である馬氏が担い、青海を管理支配していたその制度と具体的な方法であった。1928年に青海省の独立とともに廃止されることになるため、一行のこの「朝宗の礼」との出会いはきわめて貴重であり、当時、西寧の馬氏がどのような形で青海入りし、青海で各酋長をどのように管理支配していたかを示すこの記録自体もきわめて貴重だといえる。

6. 現在の青海省

2008年8月下旬、われわれが訪れた青海では書院生の青海コースもそのほとんどをトレースした形であった。もちろん、それ以外にもっと広く各地を巡り観察することができた(図6)。

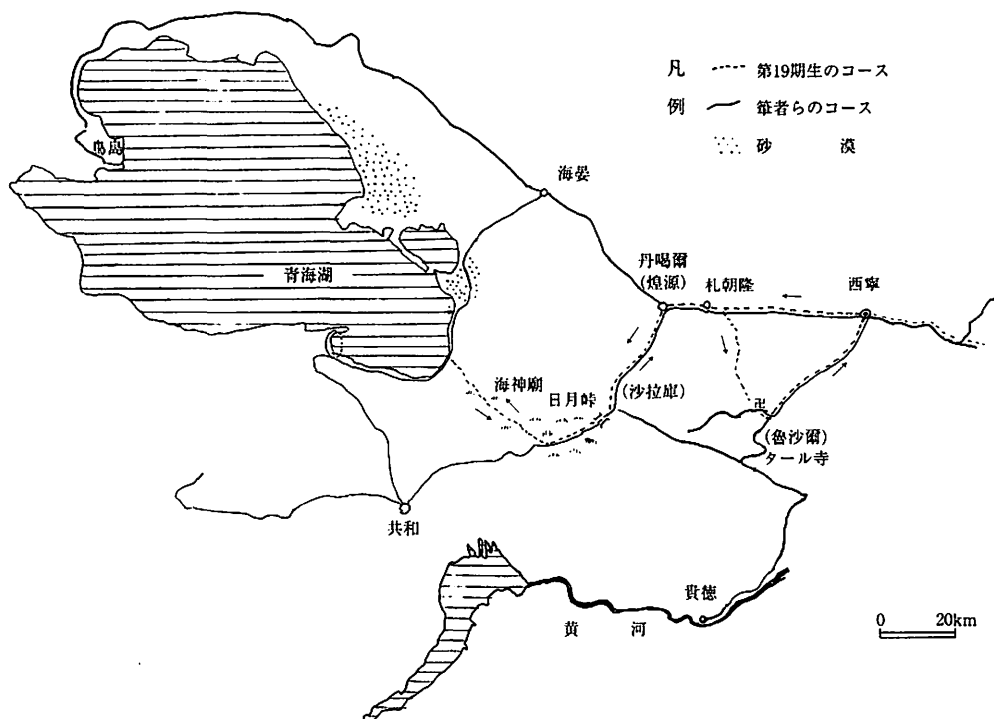


図6 第19期生の「青海行」コースと筆者らが2008年8月に巡検したコース(藤田原図)



書院生の記録と比較すると、大きく変わった点とあまり変わらない点があることがわかった。

大きく変わった点は、省都になった西寧が高層ビルの林立する近代都市に変わった点である。しかも省人口の20%の人口を西寧川河谷のこの一角に集積し、他の都市とは全く比較にならない規模に発展し、いちじるしい中心性を高めていることである(写真9)。西部開発による資本投下は省内



〔写真9〕今日の西寧市街地(2008年8月撮影)

を支配する省都に集中したことを示している。かってせいぜい4～5階建てのビルが今や10階や20階へと天に伸びたのはこの西部開発によるものであり、まだ最近のことである。狭い谷に広がる西寧の町は排気ガスや排煙のため、風のない日は空気がよどみ、スモッグの町となり、せっかくの高層ビルも汚れがちである。

それでも高速道路や公園なども比較的合理的に配置され、地方政府による中央集権的な都市計画とその実施も読みとれる。

道路整備は郊外へも延び、高速道路、準高速道路など基幹道路はかなり整備され、自動車以西寧を中心に広域のネットワークを形成しつつあることがわかる(写真10)。書院生の移行した時に日月峠以西は道がない遊牧の世界であったが、今日では舗装された基幹道路が草原・乾燥地帯を貫いている。

このような道路整備は、当然商品経済を拡大させ、書院生の旅行時に物々交換経済であったレベ



〔写真10〕沙漠の中も貫ぬく高速道路(2008.8撮影)

ルが、今日では貨幣経済の波の中へ呑み込まれている。それとあわせて、漢人の流入が顕著で、約540万人の省人口のうち54%(2004年)を占め、チベット族の23%、回族の16%、蒙古族の1.8%を大きく引き離している。

かって、チベット人の聖湖であった青海湖は今も青色の美しい色をたたえている(写真11)が、



〔写真11〕青海湖と湖畔(2008.8撮影)

戦後、全国各地から漢人が青海湖の煌魚の漁獲のために移住し、乱獲して地元チベット人の反発を招いた。また漢人は周辺の乾燥地に入植開拓し、砂漠化を引き起こしたりしてきた。そして家畜の増加で、書院生が見た背丈ほどもある草は消失し、低草化や裸地化もみられるようになった。小さな湖が消失した例もいくつかみられる。

今、そのような経済成長にともなう環境の変化に地方政府である青海省当局も対策に乗り出しつ

つある。青海湖の煌魚の保護、遊牧民の放牧地制限、退耕還草、ハゲ山や草原における草地植生の回復などがそれだし、西部の一带の黄河、長江、メコン川の水源地域の保全も急務だという。

そんな中で、用水の得やすい黄河流域では施設園芸もみられ、農家所得は増加し、遊牧の草原地帯では天幕生活もみられる一方、レンガづくりの新しい家が草原上に散在的に建設され、天幕に代わりつつある部分もある。また乾燥地では草地保全のため、生態移民受け入れ用の現代版棟割り長屋が草原の中にコツ然と出現したりしている異様な光景も目にしたりする。

同じ青海省になったが、日月峠の東と西では今日でも基本的には書院生時代と同様に地域差があり、そこで地域区分ができる。9世紀、唐とチベットの国境がここに設けられ、「唐蕃会盟碑」が建立設置された理由はよくわかる。自然生態系はいちじるしい地域差を示すが、道路やラサ行き鉄道はそれを無視するかのようにそんな地域差を貫き、かつての馬に代わって自動車が主な交通機関に変わっている。それが羊毛や地下資源など新たな開発が日月峠を越えつつあるし、遊牧世界は今や保護されるべき時代へと入りつつあるといえる。

7. おわりに

以上、東亜同文書院生の「大旅行」のうち唯一の青海行きの旅行記録を中心に、当時の青海の地域像を浮かび上がらせようとし、あわせて今日と同コースの比較も行った。

当時は青海は省として独立しておらず、当然で

はあるが、書院生の記録にも「青海」という名称はあるが、「青海省」という名称は使われていない。当時の青海は蒙古人やチベット人を中心とした世界であり、18世紀に清朝の雍正帝の支配下に組み込まれて、蒙古の部族は盟旗制、チベットの部族の長には土司職を与えられることで再編成されたが、いずれも異質の世界であった。それは非定住の遊牧民の世界である点に変わりはなく、農耕民の漢人世界とは大きく異なっていた。

そこで清朝は清末になると、当時は甘肅省の西端で青海地域にほぼ隣接する西寧から、いわば青海地域を遠隔支配をする方法を取り、イスラム教徒の馬將軍の支配下に置いた。しかもそれは青海全域にはとても及ばず、青海湖付近までの青海の東部だけに留まっていた。

そんな状況下で書院生は蘭州の前田氏や西寧の馬氏に会い、青海入りしたのである。書院生は知事に会うのを慣例としており、支配者の馬騏將軍にはほぼ順当に会うことが出来た。そして「朝宗の礼」を行うための「秋の巡狩」に同行できたのは奇蹟的な体験であったといえる。

西寧からはすでに降雪と厳寒で晩秋の気配が強い厳しい山道を登り、日月峠を越えた途端に全く異なる大草原に分け入り、道なき道を青海湖をめざすという青海の異質性、地域差を体感している。美しい青海湖に感激し、それが塩湖であることも確認している。

全行程180日余のうち、10日にも満たない青海行きであったが、「青海省」になる前の青海の原形を体験できた点では、きわめて重要であり、貴重な記録であるといえることができる。



〔注〕

- (1) 藤田佳久 (1989) 「東亜同文書院学生の中国調査旅行コースについて」、愛知大学国際問題研究所紀要、第 90 号
- (2) 東亜同文会 (19 ~ 19) 『支那省別全誌』全 18 巻、同会刊
- (3) 東亜同文会支那省別全誌刊行会 (1943 ~ 1946) 『新修支那省別全誌』(全 18 巻のうち 9 巻まで)、同会刊
- (4) 東亜同文書院第 19 期生・隴綏羊豚羊毛皮調査班 (1922) 「青海行」、『虎穴龍額』、東亜同文書院刊、P . P . 1 ~ 64、所収。
ただし、「大旅行」直前の 2 期生 5 人で行なわれた西域調査では、そのうち波多野養作はその途中で西寧まで立ち寄っている。
- (5) 前掲 (4) P . 21
- (6) 前掲 (4) P . 22
- (7) 前掲 (4) P . 22
- (8) 前掲 (4) P . 22
- (9) 前掲 (4) P . 22
- (10) 東亜同文会 (1943) 『新修支那省別全誌・甘肅省』 P . 99
- (11) 前掲 (4) P . 21、 P . 59
- (12) 前掲 (4) P . 24
- (13) 前掲 (4) P . 28
- (14) 前掲 (4) P . 28
- (15) 前掲 (4) P . 33
- (16) 前掲 (4) P . 60
- (17) 前掲 (4) P . 33
- (18) 前掲 (4) P . 33
- (19) 前掲 (4) P . 31
- (20) 前掲 (4) P . 31
- (21) 前掲 (4) P . 31
- (22) 前掲 (4) P . 31
- (23) 前掲 (4) P . 32 ~ 33